河上肇全集 第三巻

河上徹太郎全集

第三巻

勁草書房刊

河上徹太郎全集　第三巻

昭和四十四年十月二十日第一刷発行

著者　河上徹太郎
発行者　井村寿二
印刷者　白井倉之助
印刷所　精興社
製本所　牧製本
発行所　勁草書房
東京都千代田区神田駿河台二ノ三
電話東京(二九四)六一二一
振替東京　一七五二五三

© T. Kawakami Printed in Japan

(落丁・乱丁本はお取替えいたします)

0390—831310—1836

河上徹太郎全集　第三卷

編纂委員

石川　淳

井伏鱒二

小林秀雄

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

目次

作家論

ジッドとワイルド（譯述）……13
レオ・シェストフについて……30
シェストフの流行について……38
シェストフの思想……41
「轉向の日記」にあらはれたアンドレ・ジィド……46
ジイド研究……49
アンドレ・ジイド……49
鎖を離れたプロメテ〔作品研究一〕……64
パリュウド〔作品研究二〕……76
背德者〔作品研究三〕……84
窄き門〔作品研究四〕……90
シェストフ……94
ボードレール—詩人と社會……107

チエホフ……121
ヴェルレーヌ……128
ジイドとクローデル……136
＊
葛西善藏……145
森鷗外……151
鷗外の文藝評論……154
岩野泡鳴……160
夏目漱石……167
谷崎潤一郎……174
書簡から見た梶井基次郎氏……180
牧野信一追悼……182
詩人・佐藤春夫……187
岸田國士論……192
死んだ中原中也……198
志賀直哉―『暗夜行路』に於ける美と道德……200

正宗白鳥……207
萩原朔太郎……213
横光利一……220
菊池寛……228
牧野信一……232
椎名麟三—公開狀の形で……235
三好達治論……239
永井龍男論……245
横光利一斷章……251

文學手帖

眞船豐……257
小林秀雄……260
丸岡明……263
田中英光……266
田中英光の死……269
久保田万太郎……270

清水崑……271
井伏鱒二……273
「山繭」と「白痴群」……274
中原中也との交遊……277
陶晶孫……279
火野葦平……280
危機の作家たち
まへがき……285
小林秀雄……287
横光利一……311
ドストエフスキーの世界……336
思ひ出にまつはる文學論
堀辰雄……357
正宗白鳥……361
久保田万太郎……363
坂口安吾……367

作家の詩ごころ

堀辰雄……373
武者小路実篤……399
谷崎潤一郎……408
梶井基次郎……412
嘉村礒多……415
中島敦……418
坂口安吾……420
大仏次郎……423
舟橋聖一……428
顔・舟橋聖一……433
中山義秀……435
井上靖……441

日本のアウトサイダー

序……453
中原中也……457

萩原朔太郎……472
昭和初期の詩人たち……482
岩野泡鳴……492
河上肇……502
岡倉天心……513
大杉栄……530
内村鑑三……539
正統思想について……558
あとがき……568

日本のエリート

エリートとは何か……571
明治におけるエリート……575
選ばれたものと背くもの……579
異端の精神……583
辻潤、武林夢想庵……588
太宰治……593

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

小林秀雄……597
達治詩日記……603
解説……中村光夫……629
解題……大平和登……633

作家論

ジッドとワイルド

一

ジイドが最初にワイルドに出會つたのは一八九一年であつた。當時ジイドは漸く處女作「アンドレ・ウルテルの手記」を發表したばかりの二十三歳の青年であつたに對し、ワイルドは三十八歳でその成功の頂點にあつた時であつた。その著書は驚異と歡喜を以て迎へられ、その脚本は全ロンドンの流行であつた。彼は富み、美しく、名聲と幸福に滿ちてゐて、アジアのバッカス、ローマの皇帝、さてはアポロにすら擬せられてゐる時であつた。

ジイドは當時有名なマラルメのサロンに出入してゐたが、海を越えてこの祕教の詩人の會合でも、ワイルドのことが「眩惑的な話し手」であるとしてよく話題に上つた。そこで彼はワイルドに會ふことを渴望してゐたのだが、漸く願がかなつて或る友人の手引により彼と會合する機會を得た。

それはある料理屋で、會する者四人、然し語る者はワイルド一人であつた。

ワイルドの話は、會話といふよりも寧ろ物語であつた。食事の間中彼は物語を止めなかつた。その話し振りは穩かで徐く、その聲は立派だつた。尤も彼の話としてはその日はこんがらかつてをり、餘り上出來の方ではなかつた。彼は未知の聞き手達を試してゐるのだつた。己が智慧或は痴愚の內で、聞き手に面白いと思つたものしか口にしなかつた。卽ち銘々の嗜好に應じて糧を與へた。だから期待を持たない者は泡みたいなものしか貰へなかつた。そして彼は先づ人を面白がらさうとしてかかるものだから、彼を識らうとした人の大部分は、只面白い人だと思つただけだつた。

食事が終つて外へ出ると、他の二人は一緒に歩き、ジイドがワイルドと二人で少し離れたとき、ワイルドは突然いつた。

——君は人の話を眼で聽いてゐる。それについて御話をしてあげよう。

ナルシスが死んだとき、野の花達は悲みに沈んで、涙を流すために小川に水をくれと賴んだ。小川は答へた。「私の水が皆涙になつてしまつたら、自分でナルシスのために泣くのに足りなくなるだらうよ。私は彼を愛してた。」野の花は答へた。「君がナルシスを愛さなかつたなんてことがあるものか？　彼は美しかつたもの。」「彼が美しかつたつて？」「君が一番よくそれを知つてる筈ぢやないか？　每日ナルシスは屈み込んで、君の水の上に綺麗な顏を映してたのだもの。」

ワイルドは一寸口を閉じた。

——その時小川は答へた。「私が彼を愛したつていふのは、彼が私の上へ屈み込んだとき、その眼の中に私の水が映るのを見たからさ。」

といつてワイルドは身を反らせ乍らカラカラと薄氣味惡い笑をやつて更に附加へた。

——それが、おけら根性つてものさ。

初對面の時のジイドの美しい思ひ出はそれで終つてゐる。ここでワイルドは生活の王者ではない迄も少くも存在の王者である。藝術は存在の前に屈してそのおけらになつた。この兩者の位置關係はここで確立されて、以後暫く同じ狀態が續く。

人前ではワイルドは假面を被つてつとめて驚かさうとか面白がらせようとかした。彼の本音を聞くには、彼とさしにならねば駄目だつた。

或る時二人だけのとき彼はジイドにいつた。

——昨日から君は何をしてた？

當時彼の生活は何の波瀾もなく流れてゐたので、その話は何の興味もないものしか出來なかつた。彼はおとなしく瑣事を語つたのだが、その間にワイルドの顏が段々曇つて行つた。

——君がやつたつてことはほんとか？

——ええ、とジイドは答へた。

——そして君のいつたこともほんとか？

——ほんとです。

——ぢや何だつてそんなことを話すのだ？　そんなこと少しも面白くないのは君にだつてよく判つてるぢやないか。君覺えとき給へ。二つの世界つてものがあるのだ。一つは話さなくつても存在してゐる所謂現實の世界、つまりその世界を見るためには話をする必要はないのだ。そしても一つは藝術の世界で、それは話さなくてはならない。話さなくては存在しないのだ。

昔或る所に一人の男があつて、その男は話し上手だものだから皆に愛されてゐた。毎朝その男は村から外を出歩いてゐて夕方村へ歸つて來ると、終日働いてゐた人達は皆その男を取圍んでいふんだ。さあ、話してくれ。今日はどんなものを見て來た？　すると男は話す。今日は森へ行くと牧神が笛を吹いてゐて森の神にロンドを踊らせてた。そして他の人達が、もつと見て來たものを話してくれ、と賴むと、——私が海邊へ着いたとき、波の中に三匹の人魚がゐて、金色の櫛で綠の髮をかいてゐた。そんな風に、彼は話が面白いものだから皆に愛されてゐた。

或る朝いつものやうに村を出たが、海岸へ行つて見ると彼は三匹の人魚が波の中にゐて金の櫛で綠の髮をかいてるのをほんとに見た。そして尙歩き續けてると彼は森の傍で森の神達に笛を吹いてロンドを踊らせてる牧神を見た。その夕方村へ歸つて皆の者にいつものやうに話してくれと賴まれたとき、彼は答へた。——私は何も見なかつた、と。

ワイルドはしばらく默つてその話の效果がジイドの腹にはいり込むのを待つた後、續けた。

——私は君の唇が嫌だ。まるで一度も嘘をついたことがないかのやうに眞直になつてゐる。君に嘘をつくことを覺えて貰ひたい。そしたら君の唇も古代の假面のやうに美しくひん曲るだらう。

依然として同一の優越。然しこの話がこの實在の二個性の事實談として一層の興味を惹起すものは、唯一のものを信ずる異教徒と自然神教的なキリスト者との出會ひといふ反語である。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com